

全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会(1968～1977)の研究(5) — 第8回大会の概要と競技記録 —

A Historical Study of the Noto Peninsula Ekiden for Selected Japanese Universities during 1968-1977, Part 5 — Documentations and Records of the 8th Race Competitions —

大久保 英 哲 (人間科学部スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Specially-appointed Professor)

親 谷 均 二 (人間科学部スポーツ学科非常勤講師)

Kinji OYATANI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Part-time Lecturer)

北 川 潔 (星稜高校陸上競技部顧問)

Kiyoshi KITAGAWAZA (Seiryō High School, Track & Field Club Adviser)

櫻 井 貴 志 (人間科学部スポーツ学科准教授)

Takashi SAKURAI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Associate Professor)

佐々木 達 也 (人間科学部スポーツ学科講師)

Tatsuya SASAKI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Lecturer)

西 村 貴 之 (人間科学部スポーツ学科講師)

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Lecturer)

阿 羅 功 也 (人間科学部スポーツ学科助手)

Koya ARA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Teaching Associate)

〈要旨〉

第1回開催(1968)から第10回大会(1977)まで行われた「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会」(「能登駅伝」)は、かつて日本大学三大駅伝と言われた大会のひとつであった。筆者らは、この日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程を明らかにすることを目的に、第1回開催(1968)から第7回大会(1974)までの各大会のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録等をまとめた。本稿では、第8回大会(1975)のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録をまとめ、報告する。

〈キーワード〉

能登駅伝, 駅伝競走, 実施記録

はじめに

本論文は、大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程—第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで—」(金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号)をはじめとする一連の研究⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾に引き続く論考であり、第8回大会分のコース、実施記録、選手名、順位、タイム、大会の特色等を明らかにする。

1. 第8回大会 1975(昭和50)年

開催期間は1975(昭和50)年11月22日～11月24日。主催は、北信越学生陸上競技連盟、読売新聞社、報知新聞社。

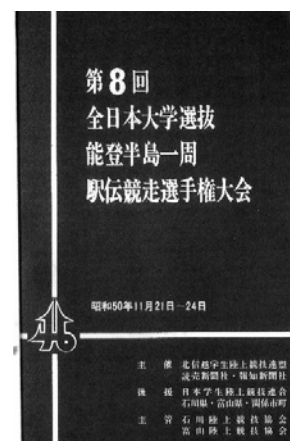
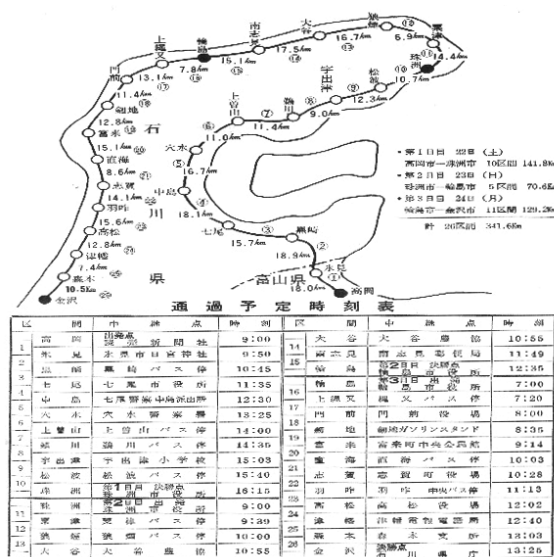


写真1. 第8回大会プログラム表紙

後援は日本学生陸上競技連合、石川県、富山県、関係市町。主管は石川陸上競技協会、富山陸上競技協会である。

参加チームは、北海道選抜、東北選抜、北信越選抜、日本体育大学、順天堂大学、大東文化大学、東京農業大学、中京大学、大阪体育大学、京都産業大学、中・四国選抜⁽⁵⁾である。前回大会出場した大阪商業大学が不参加で11チームの参加。第8回大会プログラムによれば、コースや通過予想タイムなどは前回大会と全く同様である。



で、小旗の歓迎や激励をしようと、スタートを待ちかねている。参加11チームのたすきの色は、北海道学連＝青色、東北学連＝緑色、北信越学連＝赤色、日体大＝茶色、大東文化大＝黄緑、順天堂大＝紺色、東京農大＝黄色、中京大＝朱色、大阪体育大＝空色、京都産業大＝桃色、中・四国学連＝橙色。

第1日目 大東大、2連覇へ快走

読売新聞11月23日朝刊⁽⁸⁾は次のように報じている。

11月22日、第1日目の気温は10.9度、湿度60%、快晴という絶好のコンディション。午前9時、読売新聞北陸支社前を木村一義大会副会長（同支社長）の号砲で一斉にスタートした11選手は、晩秋の北陸には珍しい青空の下、軽快な足取りで氷見海岸沿いに一路能登半島を北上した。スタートから抜きつ抜かれつの手に汗握る好レースを展開。沿線の住民は、選手一人ひとりに小旗を振っていっぱいの声援を送った。1区は、高岡市国分を過ぎる6km地点まで一団となって通過。雨晴海岸に出る頃には、混戦から北中（日体大）がわずかにリードを奪った。これを重成（順天堂大）、伊藤（大東文化大）、田中敏（中京大）、丸橋（東京農大）が一線となって追ひ、わずかに遅れて江口（中・四国学連）、末永（東北学連）、西田（京都産業大）らが続いた。地元、北信越学連チームは、8km地点でトップグループから200m余り引き離され10位と、1区からやや苦しい戦い。第1中継点の氷見市・日宮神社前では、北中が54分29秒の区間新記録で一着。順天堂、大東文化、中京、東京農各大学も55分台で第二走者にたすきを渡した。2区は、3日間の全コースを通じて最長の18.9km。各チームともスタミナのあるエース級を投入。中でも毛利（中京大）は、力強い足取りでぐんぐん追い上げ、次々に前の走者を捕らえた。氷見市大境の県境付近では、トップの関（日体大）と激しいデットヒート。10km地点の下り坂では、関に50m余りの差を付け、3区の中瀬へ。東京農大も好調山岡が、期待通りの力走を見せて、区間2着で黒崎中継点に入った。5区に入り、首位争いは大東文化大の切り札、大久保の快走で一転した。小菅（東京農大）、関口（日体大）、大久保と、それぞれ約200m間隔で中島中継点を出発した先頭グループは、5km地点で関口が小菅を捕らえてトップに出た。大久保も昨大会で3日間連続区間新、区間最高記録保持者らしく、上り坂を速いピッチで駆け上り、首位との差を縮め、穴水中継点まで約200mで、ついに先頭に出ていた関口を抜き去って、大東文化大は待望の首位に躍り出、首位争いは大東文化大、日体大の2校に絞られた。6区の穴水―上曾山間では波静かな能登内浦を右手に後藤（大東文化大）と日下（日体大）がぴったりくっついて互いに一步も譲らない接戦を続け、中間点を過ぎるころ

から後藤がピッチを上げ、33秒差で7区に引き継いだ。大東文化大にとっては、この後藤の予想以上の力走（青葉監督）が大きかった。7、8区で日体大の中村、荻谷の巻き返しにあったが松岡、岩元が堅実なレースで首位を守った。9、10区では塩野、菊池が好タイムでじわじわ日体大との差を広げ、1日目での初のトップを奪った。前半好調に飛び出した中京大は3、4、5、7区でのブレーキが痛く、3位の東京農大と3分27秒差で4位。首位争いに参加すると見られた順天堂大は、1区重成、5区田中らの活躍があったもののペースに乗れず、5位に甘んじた。

このほか関西勢の京都産業大、大阪体育大は、通算タイム7時間40分台と奮戦、北信越学連チームは表（金沢経大）、堀（金沢大）が区間で8着に入る健闘を見せ、東北学連に4分5秒差で10位に食い込んだ。

さらに、沿道の応援の様子を次のように述べる。

この駅伝は、能登半島国定公園指定を記念して発足したもののだけに、七尾市役所では「手のすいた人は、駅伝の応援に出てください」と庁内放送。このため市職員が市役所前の中継点付近に出て、読売旗を振りながら声援。春木秀夫助役も「スポーツに打ち込む若い人を見るのは本当に好きだ」と言って「頑張れ、頑張れ」の連発。汗だらけで力走する選手たちをねぎらったり、励ましたり。

第4中継点の鹿島郡中島町に入る手前では、紙製ながら長さ6mもの「ガンバレ・ファイト」と書かれた横断幕が張り出されていた。県立中島高校陸上競技部（30人）が今年も大学のお兄さんたちの健闘振りを称えようと、急ぎで作ったもので、下校途中の生徒たちは沿道に並んで声援。選手が通るごとに、「ファイト」などの掛け声と拍手を送った。

下校途中の児童生徒も立ち止まって応援している様子が掲載されている。また、「駅伝がやってくると能登の冬は近い。本格的な鰯のシーズンがやってくる」と漁師が語っていることから地元の人々にとって、毎年恒例の行事として親しまれていることがわかる。

第2日目 日体大逆転、死闘の1秒差

2日目のもようを読売新聞11月24日朝刊⁽⁹⁾は次のように報じている。

第2日目の奥能登地方は、前日の好天から一変、冷え込みが強く時折激しい雲が降るあいにくの天気。選手たちは、頭からずぶぬれになって、内浦から外浦をひた走り。2日目のゴール、輪島市役所に向けて力走した。日曜日とあって、沿道には家族ぐるみの見物の姿も目立ち、奥能登



写真3. 門前町剣地中継点にて、冷雨の中、たすきを繋げる選手たち（読売新聞11月25日）

観光客も混じっての声援が飛び交い、駅伝ムードは最高潮。珠洲市役所をスタートした11選手は、珠洲市街地を一団となって通り抜けた。7km過ぎる中間点付近から、レース展開は日体大、大東文化大が飛び出し、1日目後半と同じレース展開になった。粟津中継点では和田（日体大）が43分3秒の区間新記録でたすきを竹林に渡し、6秒遅れて小林（大東文化大）も区間新記録で12区の宮地へ引き継いだ。同中間点では、大東文化大に続き東北学連の末永が健闘して3着、東京農大、北海道学連、中京大、順天堂大の順で通過した。12区からは日体大、大東文化大の両校が、完全に他チームを引き離し、首位争いは2校に絞られた。13区は16.17kmと、2日目の最長区間。しかもラケット道路など起伏と曲折が随所に出てくる難コース。12区で約100mのリードを奪った日体大は興水が白い手袋を軽快に振るきれいなフォームで飛ばした。追う大東文化大は、前日2人抜きで首位に立つ立役者になった大久保が、力強いフォームで興水を追い、追い越せるかどうか、この日最大の見せ場を作った。大久保は前半、6km地点で一時、興水を追い上げ、差を50mにまで縮めたが、中間点付近では興水がまた差を広げ、監督者からの指示も、「いち、に、いち、に」とハイピッチで激励する。あと1kmで大久保がスパートしたが結局、追いつけず、ゴールでの興水との差は10m余り。大東文化大の首位奪回は、14、15区に持ち込まれた。結局、日体大は、13区で大久保の追走をかわした興水の力走と、続く14区で、区間最高タイムを出した斗高、15区の照井の頑張りかものを言い（岡野日体大監督）、大東文化大の懸命の追い込みをかわし、わずか1秒差ではあったが、通算でも逆転して首位に立った。

1日目、3、4位の東京農大、中京大は、藤本、壱岐（東京農大）、田中盟、前（中京大）が健闘したが、悪天候に記録を縮めることが出来ず、日体大、大東文化大との差を詰められなかった。

下位グループでは、東北学連、北海道学連の踏ん張りが目立ち、最終日、北信越学連、中・四国学連などの順位争いも興味がある。

第3日目 北中VS大久保で決着

最終日のもようを読売新聞11月25日朝刊^⑧は次のように報じている。

最終日のハイライトは、2日目に、わずか1秒差で“逆転首位”に立った日体大と、これを追う大東文化大のトップ争い。輪島市役所前をスタートする、この日最初の16区は、この2校に巻き返しを狙う順天堂大、東京農大、大阪体育大、中京大が加わり、区間1着の新原（順天堂大）から6着の前（中京大）までが区間新記録と言うハイペースのレース展開になった。霰に降られた17区では、中京大、大阪体育大、順天堂大、東京農大がやや遅れを取り、先頭に出た北中（日体大）を3日連走の大久保（大東文化大）が追い、山道を縫って、中継点の門前に向かった。大東文化大は、大久保の快走を期待し、この区間で一気にトップに出る作戦だったが、6.5kmの中間点付近で、一時は大久保が北中を15m差まで追い上げたものの、北中の好走の前に抜ききれなかった。

中継点まであと3.7kmの地点では、大久保に疲れが出て逆に北中に引き離され、16区からの通算で27秒の差をつけられて18区へ引き継いだ。日体大は北中の頑張りが物をいい（岡野監督）、18区以後も、和田、塩塚、山根、荒野、日下が区間新記録を出す力走を見せ、大東文化大の中盤ブレーキにも助けられて差をぐんぐん広げた。21区への中継では3分35秒引き離し、最終の26区では、5分1秒という予想外の差をつけた。

この日、好調なスタートを切った順天堂は、19区で小倉が38分16秒の好タイムを出して、3位を走っていた丸橋（東京農大）を抜いた。その後も重成（21区）、田中（22区）が飛ばし、ブレーキを起こした大東文化大をも追い抜く大活躍を見せ、通算で3位に食い込み、気を吐いた。「打倒関東勢」を目指す中京大もこの日の通算で6時間41分58秒と前回の記録を大幅に更新。上位陣を脅かす存在に躍進。今後の活躍に明るい材料を残した。また、大阪体育大、京都産業大の両校は、総合順位こそ前回と同じ6、7位にとどまったが、いずれも記録を短縮。北信越学連チームも28分余りも短縮するなど各学連チームも、下位に甘んじたいえ、各選手の走法などに進歩の跡が見られ、大きな収穫だった。また役員の様子を次のように述べる。

羽咋郡富来町生神の三差路で「監察員」の腕章をはめ、手際よく車をさばいていたのが富来町長の雲田登さん。（中略）歯を食いしばって力走する選手には「がんばれ」。一方、大会関係者には「ご苦労さん」と声をかけて回り、この“駅伝町長さん”は、この日、大車輪の活躍ぶりだった。

最終区間の森本—金沢間は、市街地なので交通量が多い。このため金沢東警察と星稜高校陸上部員が出て、交通整理。

さらに沿道の応援の応援風景についても次のように報じている。

羽咋郡押水町今浜の十字路では「頑張れ、第8回能登駅伝」と大書した横断幕を広げ、手には参加11チームのプラカードを持ち、声を張り上げて、応援する高校生の一団が目立った。近くの宝達高陸上部の1年男女十数人で、この駅伝監察員兼石川県陸協の強化部長をしている小町昂宝達高教諭の「一流選手が走る駅伝を見ても」という指示で、応援にはせ参じることになったもの。

第8回大会講評

第8回大会について読売新聞11月25日朝刊^[1]で坂井敏夫審判長が次のように講評している。

1日目は好天に恵まれたが、2、3日目は悪天で難しいレースになったにも関わらず、選手は良く頑張った。記録的には、1日目、3日目に区間新記録の多くが更新された。総合タイムでは、日体大、大東文化大の両校が、昨年の大会記録を7分以上も上回り、全体的に、記録の短縮には目を見張るものがあった。この裏には、休日に早朝から沿道に出て声援してくれた多くの地元の人たち、また各中・高校陸上部の横断幕などを持ち出しての応援があり、温かい人情が選手たちの励みになった。トップがこれほどめまぐるしく変わったことも過去になかったことで、濃くチームの力の接近も強く感じた。ただ、依然として関東などの単独チームとそのほかの学連チームとの力の差が大きかったのは残念で、この中間の穴を埋める意味で、大阪体育大や京都産業大などの“あと一歩”の奮起を望みたい。

表1. 第8回大会の記録

チーム名(監督)		日本体育大学 (岡野 章)	大東文化大学 (青葉昌幸)	東京農業大学 (中村 美)	順天堂大学 (沢木啓祐)	中京大学 (中尾隆行)	大阪体育大学 (小林智志)	京都産業大学 (伊東輝雄)	東北学連 (高橋真澄)	中国・四国学連 (久保田康毅)	北信越学連 (向田和義)	北海道学連 (大村良治)	
区間	高岡 ～水見	18.0km	北中 純一 ①54.29	伊藤 敏康 ③55.27	丸橋 久良 ⑤55.46	重成 敏史 ②55.13	田中 敏彦 ④55.34	森 久志 ⑨56.47	西田 義則 ⑧56.44	末永 真 ⑦56.36	江口 修 ⑥56.09	浄土 成記 ⑩59.47	田村 利光 ⑪103.59
1	～水見	18.0km	関 英雄 ③58.28	橋口 弘 ④100.00	山岡 秀樹 ②57.45	新原 保徳 ⑥101.20	毛利 奉文 ①57.08	高岡 光男 ⑦102.27	井上 正氏 ⑤100.29	高橋 守 ⑪107.41	横山 暁 ⑨106.02	立蔵 義春 ⑩106.21	土田 雅満 ⑧104.58
2	～黒崎	18.9km	荒野 吉之 ②48.48	松本 始 ①48.13	藤本 孝明 ④48.56	小倉 庸夫 ④50.34	中瀬 敬夫 ⑤51.22	大城 一利 ⑥51.30	伊藤 博幸 ⑦52.19	鈴木 長敏 ⑪100.09	新田 秀樹 ⑧54.32	山本 進 ⑩55.26	阿部 茂 ⑨55.21
3	～七尾	15.7km	塩塚 秀夫 ③57.17	秋枝 実男 ②56.14	山本 吉光 ①56.02	木崎 和夫 ④57.40	田中 盟三 ⑤58.03	藤田 洋介 ⑦59.53	村松丈太郎 ⑥58.59	佐藤 健二 ⑨102.34	沖 幸治 ⑩104.37	表 和夫 ⑧102.26	林 卓司 ⑩104.35
4	～中島	18.1km	関口 孝久 ②50.33	大久保初男 ①49.41	小菅 勝己 ④52.48	田中 登 ③52.42	原 勝利 ⑤54.18	平山 猛 ⑧57.13	藤倉 勇 ⑥55.00	村上 公徳 ⑦56.18	石原 安典 ⑨57.39	山本 太一 ⑩57.54	遠藤 正彦 ⑪100.23
5	～穴水	16.7km	日下 賀之 ②34.27	後藤 守利 ①33.54	黒岩 哲夫 ③34.53	出ノ口康生 ⑥35.33	上園 政治 ④35.10	森崎 敏隆 ⑤35.15	山口 隆樹 ⑧37.04	扇子 弘 ⑦36.48	井川 浩一 ⑩38.39	木村 直樹 ⑨38.15	小林 健二 ⑪39.55
6	～上曽山	11.0km	中村 高行 ①33.37	松岡 良隆 ②33.39	岩瀬 哲治 ③33.52	中橋富士夫 ④34.26	西井清四郎 ⑥34.37	葦原 慶治 ④34.30	今北 友幸 ⑦36.08	三浦 文男 ⑦36.10	白石 昭彦 ⑧37.10	北川 貢夫 ⑨38.00	山田 哲 ⑩38.09
7	～鶴川	11.4km	萩谷 隆司 ①27.10	岩元 修一 ②27.29	小島 要 ⑤28.52	川口 春実 ④28.31	中島 敏一 ③27.57	木村 和義 ⑦29.15	田中 義彦 ⑨30.11	谷地田幸男 ⑩30.24	山崎 佳孝 ⑥29.08	今井 行雄 ③30.57	佐藤 五郎 ⑥29.33
8	～宇出津	9.0km	山根 信二 ②37.50	塩野 一昭 ①37.41	小野寺貞夫 ⑥40.36	元山潤次郎 ③38.41	佐々木 哲 ⑤39.58	加藤 暢 ④39.51	山口 潔 ⑧41.19	安達 正敏 ⑦41.12	高沢 有二 ⑨42.45	草間 進 ④42.58	大原 和起 ⑪43.14
9	～松波	12.3km	石井 隆士 ③32.46	菊池 一成 ①32.09	福田 栄作 ⑤33.43	朝倉 忠勝 ③33.05	長友 清美 ②32.33	和久田 弘 ⑨36.28	木村 憲二 ⑥34.12	山田喜生男 ⑩36.41	石田 秀樹 ⑦35.45	堀 貴志夫 ⑧35.55	青山 延広 ⑪37.17
第一日		141.8km	②7.15.25	①7.14.27	③7.23.13	⑤7.27.45	④7.26.40	⑦7.43.09	⑥7.42.25	⑨8.05.33	⑧8.03.16	⑩8.09.38	⑪8.17.24
11	珠洲 ～栗津	14.4km	和田 誠一 ①43.03	小林 雄二 ②43.09	岩瀬 哲治 ④44.30	竹本 英利 ⑦45.16	矢戸 春寿 ⑥45.02	葦原 慶治 ④45.49	吉田 昭男 ⑨46.57	末永 真 ③44.25	下前 克己 ①51.48	山内 正人 ⑩50.00	田村 利光 ⑤44.32
12	～狼煙	6.9km	竹林 昌広 ③20.58	宮地 敏孝 ⑤21.25	藤本 孝明 ②20.48	入江 利昭 ⑦21.57	田中 盟三 ④21.18	高岡 光男 ①20.46	宮本 志郎 ⑧22.39	三浦 文男 ⑩22.51	江口 修 ⑥21.56	足立 利弘 ⑩23.24	佐藤 五郎 ⑨22.45
13	～大谷	16.7km	興水 勝美 ②51.47	大久保初男 ①51.22	寺岐 利美 ③54.11	竹島 勝己 ⑤54.54	星島 隆昌 ⑥54.56	藤田 洋介 ④54.13	山口 晴久 ⑧56.41	星 文男 ⑨57.06	川口 誠 ⑦56.28	草間 進 ⑪100.21	中西 弘和 ⑩59.08
14	～南志見	17.5km	斗高 克敏 ①55.02	阿部 和美 ②56.26	坂口 正人 ⑤58.33	箱崎 公平 ④58.21	前 政信 ③56.51	木村 俊 ⑥59.39	中田 英一 ⑧100.45	岩谷 雅彦 ⑨101.23	斉藤 英美 ⑩103.51	森 喜太郎 ⑦100.29	田村 祐一 ⑩102.15
15	～輪島	15.1km	照井 典勝 ②47.58	金田 五郎 ①47.25	保谷 藤樹 ③48.27	中橋富士夫 ⑤49.29	西井清四郎 ④48.45	池田 功 ⑩52.56	藤川 秀幸 ⑦50.33	高橋 守 ⑧50.50	登井 啓文 ⑩53.12	浄土 成記 ⑨51.10	土田 雅満 ⑥49.52
第二日		70.6km	①3.38.48	②3.39.47	③3.46.29	⑤3.49.57	④3.46.52	⑥3.53.23	⑧3.57.35	⑦3.56.35	⑩4.07.15	⑨4.05.24	⑪3.58.32
通算		212.4km	①10.54.13	②10.54.14	③11.09.42	⑤11.17.42	④11.13.32	⑥11.36.32	⑦11.40.00	⑧12.02.08	⑨12.10.31	⑩12.15.02	⑪12.15.56
16	輪島 ～上縄又	7.8km	中村 高行 ②23.30	佐藤 修一 ④23.35	山崎 寛司 ③23.32	新原 保徳 ①23.17	前 政信 ⑥24.41	森崎 敏隆 ⑤24.32	今北 友幸 ⑦25.10	鈴木 長敏 ⑧25.12	井川 浩一 ⑩26.42	足立 利弘 ⑨25.25	小林 健二 ⑪27.19
17	～門前	13.1km	北中 純一 ①39.18	大久保初男 ②39.40	藤本 孝明 ⑤40.16	入江 利昭 ④40.51	長友 清美 ④40.02	高岡 光男 ③39.58	井上 正氏 ⑦41.11	星 文男 ⑧43.36	高沢 有二 ⑩44.43	山本 進 ⑪45.20	佐藤 五郎 ⑨43.41
18	～剣地	11.4km	和田 誠一 ①33.44	塩野 一昭 ②34.18	黒岩 哲夫 ④35.15	竹島 勝己 ③35.14	上園 政治 ⑤35.18	葦原 慶治 ⑥35.41	木村 憲二 ⑦36.15	安達 正敏 ⑨37.20	新田 秀樹 ⑧37.02	棟朝 秀一 ⑩39.32	鈴木 哲 ⑪40.44
19	～富来	12.8km	塩塚 秀夫 ①37.43	秋枝 実男 ③39.18	丸橋 久良 ⑤40.31	小倉 庸夫 ②38.16	金田 泰三 ⑦41.37	大城 一利 ④40.16	西田 義則 ⑥40.52	村上 公徳 ⑧41.45	白石 昭彦 ⑩43.01	牧 昭夫 ⑨42.59	野戸 美治 ⑪46.14
20	～直海	15.1km	関口 孝久 ①45.50	松本 始 ④46.50	小野寺貞夫 ⑥48.31	朝倉 忠勝 ②46.38	田中 敏彦 ④47.34	森 久志 ⑦49.25	村松丈太郎 ⑤48.20	佐藤 健二 ⑧49.52	山崎 佳孝 ⑨50.42	立蔵 義春 ⑩51.18	阿部 茂 ⑪52.28
21	～志賀	8.6km	山根 信二 ②25.41	橋口 弘 ④25.59	保谷 藤樹 ⑤26.13	重成 敏史 ②25.15	原 勝利 ③25.46	藤田 洋介 ⑥26.24	宮本 志郎 ⑨27.10	菊地 洋 ⑩29.31	松井 幸也 ⑦27.06	半田 宗義 ⑨28.21	宮崎 俊彦 ⑩30.48
22	～羽咋	14.1km	荒野 吉之 ①41.37	後藤 守利 ④42.39	山本 吉光 ②41.45	田中 登 ③42.30	家門 広嘉 ⑥44.41	加田 普士 ⑧45.53	藤倉 勇 ⑤44.20	岩谷 雅彦 ⑦45.12	石原 安典 ⑨46.36	菊池 芳次 ⑩49.17	遠藤 正彦 ⑨47.57
23	～高松	15.6km	関 英雄 ③47.37	菊池 一成 ④48.01	山岡 秀樹 ②47.31	木崎 和夫 ⑤48.37	毛利 奉文 ①47.20	平山 猛 ⑧50.31	伊藤 博幸 ⑦49.54	扇子 弘 ⑨52.19	石田 秀樹 ⑩53.24	森 喜太郎 ⑪53.55	田村 利光 ⑥49.03
24	～津幡	12.8km	興水 勝美 ②39.46	松岡 良隆 ③39.51	福田 栄作 ⑤40.58	元山潤次郎 ①39.27	中瀬 敬夫 ④40.44	山本 一彦 ⑦42.21	山口 潔 ⑤40.58	北村 良孝 ⑨43.47	横山 暁 ⑧42.40	表 和夫 ⑩45.35	青山 延広 ⑪44.31
25	～森本	7.4km	日下 賀之 ①21.44	岩元 修一 ②21.59	加藤 安信 ④22.36	斉藤 正行 ②22.45	中島 敏一 ②21.45	坂口 隆一 ⑩24.43	藤山 孝志 ⑧24.29	成沢 正宏 ⑨24.29	川口 誠 ⑥23.12	中村 洋幸 ⑨24.35	林 卓司 ⑦24.07
26	～金沢	10.5km	竹林 昌広 ④32.40	金田 五郎 ①32.01	小菅 勝己 ②32.29	出ノ口康生 ⑧34.34	田中 盟三 ③32.30	加藤 暢 ⑥33.55	藤川 秀幸 ⑦34.19	山田喜生男 ⑨35.32	江口 修 ⑤33.06	山本 太一 ⑩35.50	山田 哲 ⑪37.32
第三日		129.2km	①6.29.10	②6.34.11	④6.39.37	③6.37.24	⑤6.41.58	⑥6.53.39	⑦6.53.42	⑨7.08.35	⑧7.08.14	⑩7.22.07	⑪7.24.24
通算		341.6km	①17.23.23	②17.28.25	③17.49.19	④17.55.06	⑤17.55.30	⑥18.30.11	⑦18.33.42	⑨19.10.43	⑧19.18.45	⑩19.37.09	⑪19.40.20

なお、同様の記事は『月刊陸上競技』¹²⁾にも収録されている。

なお記録から見ると、上位チームだけでなく、下位チームも前回大会の記録を更新しており、各チームが能登駅伝のコースに慣れ、より高度な作戦が立てられるようになったのではないかと考えられる。

また市街地では、交通量が多く、星稜高校の陸上部員が交通整理に当たったと報じられている。前回大会までの新聞記事では、高校生が交通整理に当たっているという記述はなく、第8回大会で初めて大会補助をしたものと見られる。

閉会式の様子について読売新聞11月25日朝刊¹³⁾は次のように報じている。

能登駅伝の閉会式は24日午後4時から金沢市出羽町の金沢女子短大講堂で行われ、雪辱を果たした日体大チームに、稲置繁男北信越学生陸上競技連盟会長から優勝旗が手渡された。続いて1日目から3日目までの優勝チームや区間優勝者、新記録走破者、監督、マネージャーなどにも賞が贈られた。このあと大会を振り返って坂井敏夫審判長や木南金太郎石川県陸上競技協会理事らが講評と祝辞のあと、大会委員長の相原忠英読売新聞北陸支社業務部長

が「事故もなく、無事に終了できたのは皆様のご支援があったから。最近、車が増え、駅伝を中止した大会もあるが、この大会はぜひ続け、今後ますます発展させたい」と述べ、大会を締めくくった。

まとめに変えて―第8回大会(1975年)の日本経済と大会運営―

1973年(昭和48)10月に勃発した第4次中東戦争によって、中東産油国は石油供給の削減に踏み切った。石油価格の上昇は、おりから進行していた物価高騰に追い打ちをかけた。インフレは1973年秋から急速に進行、翌1974年2月には卸売物価が37%、消費者物価が26%も高騰して、いわゆる「狂乱物価」をもたらした。1974年の経済成長率はマイナス0.8%となり、戦後初めてのマイナス成長に陥った。1975年9月期になっても企業の業績は好転せず、内需の減退と燃料価格高騰の影響を受けて、鉄鋼、化学、紙パルプなどの素材産業、海運、工作機械などは大幅な赤字だった。そのため産業界は高度成長時代の贅肉落としのため、いっせいに減量経営に向かった。企業活動の路線変更は深刻な雇用不安に発展、この年の完全失業者は100万人の大打撃を突破した。1973年11月に始まった景気後退は、1975年3月が底だった¹⁴⁾ことが後に判明するが、大会運営がほぼ順調におこなわれたのはこの第8回大会までであった。

注及び引用参考文献

- (1) 大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで―」金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号, 2015
- (2) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第1回(1968)から第10回大会(1970)―」金沢星稜大学人間科学研究第9巻2号, 2016
- (3) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第4回開催(1971)―」金沢星稜大学人間科学研究第10巻1号, 2016
- (4) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・佐々木達也・西村貴之・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程(4)―第5・6・7回開催(1972～74)―」金沢星稜大学人間科学研究第10巻2号, 2017
- (5) 第8回大会プログラム(図1, 図2とも)
- (6) 読売新聞 昭和50年11月16日朝刊
- (7) 読売新聞 昭和50年11月22日朝刊
- (8) 読売新聞 昭和50年11月23日朝刊
- (9) 読売新聞 昭和50年11月24日朝刊
- (10) 読売新聞 昭和50年11月25日朝刊
- (11) 読売新聞 昭和50年11月25日朝刊
- (12) 『月刊陸上競技』10-1, 1976年1月73頁

(13) 読売新聞 昭和50年11月25日朝刊

(14) 日本経済「第2の転換期」
http://www.dynic.co.jp/company/80/chno6/ch06-1.html
(2017年7月20日取得)

付記

本論文は、平成28年度金沢星稜大学共同研究費(研究代表者大久保英哲)の助成を受けている。大久保英哲が全体の構成や表現を含めた論文作成を統括し、親谷均二と北川潔が、これまでの所蔵資料の中から当時の記録をもとに作成した。その際、大久保が指導した鈴木仁子(2009)「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会について―第1回開催(1968)から中止(第10回大会・1977)に至るまでの経緯―」, 平成21年度金沢大学教育学部卒業論文を基本資料として参考にしてしている。また2016年11月19～21日の3日間、共同研究者(大久保・親谷・櫻井・佐々木・西村・阿羅)は、親谷の案内で、第10回大会のコース沿いに現地をトレースし、出発地点、中継点、ゴール地点を確認するとともに、コース沿いの住民に当時の駅伝がどのように記憶されているかの調査を行った。1977年を最後に大会が廃止されて、本年2017年でちょうど40年。来年2018年は開始からちょうど半世紀の50年目に当たる。この節目の期に、これらの成果をまとめていきたい。関係者諸氏のご指摘、ご叱正、また関係資料のご提供をお願いしたい。